主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	山口　元樹

主 論 文 題 名：
インドネシア国家形成期におけるアラブ人団体イルシャードの変容
―イスラーム改革主義・教育・国民統合―

（内容の要旨）

Ⅰ．問題の背景

本研究は、20 世紀の初頭から半ばまでのインドネシア（1942 年まではオランダ領東インド）におけるアラブ人コミュニティについて、イルシャード（「導き」の意）という教育団体の活動を中心に、イスラームと国民統合という観点から考察するものである。

インドネシアに居住するアラブ人の大多数は、アラビア半島南部のハドラマウト地方の出身者とその子孫、すなわちハドラミーと呼ばれる人々である。彼らは、オランダ領東インド（以下、東インドとする）のムスリム社会の中で特異な立場に置かれていた。オランダ統治期に設けられた住民区分において、アラブ人は華人らとともに「外来東洋人」に分類された。そのため、彼らは大多数のムスリムが属する「原住民」、すなわちプリブミ（土着系の住民）とは異なる法律や制度が適用された。その一方、アラブ人は、現地女性との通婚や宗教に基づく同胞意識によってプリブミのムスリム社会と結びついていた。特に 20 世紀初めまで、東インド社会におけるアラブ人の宗教的影響力は顕著であった。

東インドのアラブ人は、20 世紀前半のイスラーム改革主義運動において先駆的な活躍をしたことで知られる。この運動は、イスラームの純化及びイスラームと近代文明との調和を掲げ、イスラーム世界の復興を目指すものである。本研究が中心的に取り上げるイルシャードは、東インドのアラブ人が結成した最大のイスラーム改革主義団体であるとともに、オランダ統治期から現在まで存続する主要なインドネシアのイスラーム団体のひとつにも数えられる。この団体は主に教育の分野で活動し、東インドの各地に近代的なイスラーム教育機関を開設した。

イルシャード結成の背景には、アラウィー・イルシャーディー論争と呼ばれる 20 世紀前半に東南アジアのアラブ人コミュニティ内で起こった対立がある。大部分のアラブ人の故国であるハドラマウトは血統に基く階層社会であり、そこではアラウィーと呼ばれるサイイド・シャリーフ（預言者ムハンマドの子孫）の一族が特別な地位を占めていた。しかし、東南アジアのアラブ人コミュニティの中では、アラウィーの権威に挑戦す

るグループがあらわれた。彼らは、イスラーム改革主義を唱えるエジプト領スーダン出身のウラマー（伝統的なイスラーム知識人）、アフマド・スールカティーを指導者に迎えてバタヴィア（現ジャカルタ）でイルシャードを結成した。

アラウィーとイルシャーディー（イルシャードの支持者）の間の対立は 1930 年代前半までアラブ人コミュニティを二分したが、1930 年代後半になると新たな問題が争点になる。1920 年代末から、イルシャーディーたちを含む東南アジアのハドラミーの間では、後進的な「祖国」であるハドラマウトの改革に関心が高まっていた。これに対して、プラナカン（現地生まれ）のアラブ人によって 1934 年にスマランで結成されたインドネシア・アラブ人協会は、インドネシアこそ「祖国」だと主張し、インドネシア・ナショナリストとの連帯を目指した。その結果、アラブ人の間では、オランダ統治期の終わりまでハドラマウトかインドネシアかという帰属意識をめぐる議論が繰り広げられた。

Ⅱ．先行研究の問題点と本研究の課題

1990 年代半ば以降、インド洋海域世界各地に離散するハドラミー移民に対する関心が高まり、多くの研究成果が発表されている。オランダ統治期のイルシャードの活動に関しては、「ハドラミーの覚醒」、すなわち「ハドラミー」としてのアイデンティティの形成という文脈の中で論じられている。アラウィー・イルシャーディー論争とイルシャードの教育活動については、それぞれ次のような見解が示されている。

まず、アラウィー・イルシャーディー論争に関して言えば、かつては伝統主義的な支配階級とそれに対抗する新興勢力の間の対立として捉えられてきた。しかし、近年の研究では、イルシャーディーたちだけでなくアラウィーの多くも改革を志向しており、「イスラーム近代主義」の方法論を用いていることが指摘される。そのため、この論争は、ハドラミー・コミュニティ内の改革集団同士の方法論、主導権、そして「ハドラミー」としてのアイデンティティをめぐる争いと理解されるようになった。

そして、ハドラミーとしてのアイデンティティの形成において、イルシャードの教育活動が決定的な役割を果たしたと主張される。B・アンダーソンのナショナリズム論によれば、東インドの公教育制度は、バタヴィア（さらにはハーグ）を最終目的地とする「巡礼」の感覚をプリブミの間にもたらし、領域的輪郭を持つ「インドネシア人」意識の形成を促した。その一方、イルシャード（さらに言えばアラブ人コミュニティ全体）の教育活動は公教育制度から分離しており、「巡礼」の最終目的地も中東アラブ地域（特にエジプトのカイロ）であった。その結果、イルシャードの学校の生徒の間には、「インドネシア人」とは異なる「ハドラミー」として意識が生まれたとされる。

以上のように、近年の研究では、イルシャードの持つ「ハドラミーの組織」という性質が強調され、ホスト社会から分離する「ハドラミー」としてのアイデンティティの形成に焦点が当てられている。しかしながら、ここには次の 2 つの問題点が指摘できる。

第一に、イルシャードの「イスラーム改革主義組織」という性質が表面的にしか扱われていないことである。アラウィー・イルシャーディー論争は、東インドのハドラミー・コミュニティ内における主導権争いとされ、論争の契機となったハドラミー以外の改革主義者による議論が軽視されている。イルシャードの教育活動についても、ハドラミーとしてのアイデンティティの形成という観点からのみ論じられ、他のムスリムの存在が全く考慮されていない。

この問題点は、イルシャードの設立者・指導者でありながらハドラミーではないスールカティーがその組織や活動の中に位置づけられていないことに端的にあらわれている。スールカティーは、中東アラブ地域の改革主義運動の影響を東インドにもたらした人物の一人と評価されてきた。しかし、彼自身の改革主義思想の特徴や彼と「ハドラミーの組織」であるイルシャードとの関係は等閑視されてしまっている。

第二の問題点は、東インドのアラブ人コミュニティがホスト社会に適応し、統合されていく動きが十分に論じられていないことである。20 世紀初めまでのアラブ人たちは「アイデンティティ複合」の状態にあり、ハドラミー、アラブ人、ムスリムという複数のアイデンティティを同時に矛盾なく持っていた。しかしながら、20 世紀前半にプリブミを主体とする「インドネシア人」意識が形成されていくのと並行して、アラブ人の間では「アイデンティティ複合」の状態は失われ、「ハドラミー」としてのアイデンティティが先鋭化していったとされる。

その一方、従来の研究で、アラブ人コミュニティがホスト社会に結びついていく動きとして着目されてきたのは、インドネシア・ナショナリズムを掲げたインドネシア・アラブ人協会の活動である。しかし、実際には、イルシャーディーをはじめとするアラブ人のほとんどが、最終的にホスト社会にとどまり、独立後のインドネシア社会に受け入れられていった事実が看過されている。

従来のインドネシア・ナショナリズム研究は、プリブミによる「世俗的」な運動を中心としており、少数派の問題やイスラーム勢力の動向が十分に考慮されてこなかった。近年では、近代以前から存在した東南アジアのムスリムの共同体意識がインドネシア・ナショナリズムの基礎として中心的な役割を担ったとする議論も見られる。しかし、その議論も、アラブ人を異質な存在として扱っており、プリブミを中心としている点では

従来の研究と変わりない。

以上の問題点を踏まえ、本研究は、イルシャードの教育活動を中心に、国民国家の形成期である20世紀初頭から1950年代までのインドネシアにおけるアラブ人コミュニティについて論じる。なお、近年の研究は、「アラブ人」と「ハドラミー」を同義語のように扱っているが、本研究ではスールカティーのようなハドラミー以外のアラブ人の重要性を考慮し、両者を峻別して用いる。

本研究は次の2つの課題に取り組む。第一に、イルシャード内の「イスラーム改革主義組織」という性質の持つ意義を明らかにすることである。特に、イルシャードの指導者でありながらハドラミーではないスールカティーの役割に着目し、彼の改革主義思想の特徴とそれがイルシャードの活動に及ぼした影響を検証する。また、アラウィー・イルシャーディー論争に関しては、ハドラミー・コミュニティ内の主導権争いという地域的に限定された枠組みの中でのみ捉えるのではなく、イスラーム改革主義運動という超地域的な文脈を考慮に入れてその性質を考察する。

もうひとつの課題は、イルシャードの活動の中から、アラブ人コミュニティがホスト社会に適応し、統合されていく動きについてその要因及び過程を明らかにすることである。本研究では、その動きにおいてこの団体の持つ「イスラーム改革主義組織」という性質が重要な役割を果たしたことを提示する。これに関しては、アラブ人がプリブミの大多数と同じくムスリムであることから、社会的紐帯としてのイスラームの役割を考察する上でも意義があると思われる。

本研究が依拠した史料として、まず東インド及びシンガポールのアラブ人たちが編集・発行した定期刊行物、アラブ人による著作、そしてアラブ人の団体及び個人が発行した冊子類があげられる。さらに、オランダ植民地政庁の報告書やプリブミのムスリムたちが編集・発行したムラユの定期刊行物なども用いている。

Ⅲ．本論の概要

本研究は、序章、6 章の本論、そして終章から構成されている。以下では、本論の概要について説明する。なお、インドネシア史では、1920年代末にインドネシアという国民国家の概念が確立されたと理解されている。そこで、本研究では、それ以降の時期に関しては、オランダ領東インドではなくインドネシア、ムラユ語ではなくインドネシア語という言葉を用いる。

まず、第1章では、イルシャードの設立者・指導者であり、この団体の「イスラーム改革主義組織」の側面の中心的存在であるスールカティーについて、その思想形成の背

景と東インドに赴くことになった経緯を論じる。この章では、マッカにおけるスールカティーの経歴に着目し、東インドとマッカの結びつきやマッカの教育活動を検討する。マッカでは、19 世紀後半から教育改革運動が展開しており、それへの関与がスールカティーの思想形成に大きな影響を与えたと考えられる。スールカティーが東インドに赴くことになったこと関しては、東インドとマッカの間に緊密な学問ネットワークが存在していたことが重要である。また、彼を招聘したのが東インドの近代的イスラーム団体であったことから、教育改革運動への関与も東インドに渡ることになった要因のひとつであったと推察される。

第 2 章では、東インドにおけるアラブ人コミュニティの「覚醒」の動きと広域的なイスラーム改革主義運動との関係から、イルシャード結成の経緯とこの団体の結成時の性格について検討する。それによって、イルシャードにおけるスールカティーの位置づけを試みる。東インドにおけるアラブ人の「覚醒」とイスラーム改革主義運動は相互に関わり合いながら発生し、その中からアラウィーの権威に挑戦するハドラミーの運動があらわれる。イルシャードを結成するグループは、アラウィー・イルシャーディー論争の発端において、ハドラミー・コミュニティの外部にいる改革主義者から理論的根拠を得た。しかし、イルシャードにおける「ハドラミーの組織」という性質と、スールカティーを中心とする「イスラーム改革主義組織」という性質には相反する点があった。

第 3 章では、イルシャードの動向を中心に、インドネシア・ナショナリズムが形成されていった 20 世紀初頭から 1920 年代後半までのアラブ人コミュニティについて論じる。プリブミのムスリムと同様に、実際には、1920 年代になるとアラブ人の間でも東インドの公教育制度の利用者は増加している。また、アラブ人は東インドのイスラーム運動から排除されていたわけではなく、特に 1920 年代後半以降にはプリブミのムスリムとの間で緊密な協力関係が生じている。イルシャードの中では、1910 年代末からスールカティーによって公教育制度への対応が主導されていた。同時期のスールカティーの言説には、中東アラブ地域にイスラーム世界の中心となる教育機関を設立する構想も示されている。しかし、いずれの考えもパン・イスラーム主義的な理念に基づいている点で一致している。彼の改革主義思想の特徴は、他のアラブ人の改革主義者とは異なり、アラブ主義的傾向を示さずにより一貫して「平等主義」を唱えている点に認められる。

第 5 章では、1920 年代末からオランダ統治末期までに、イルシャードが活動の方向性を決定していく過程を明らかにする。この時期のアラブ人コミュニティの中では、ハドラマウトとインドネシアの間で帰属意識の分裂が生じていた。教育活動の停滞が問題となる中で、「ハドラマウト志向」の者がエジプトへの留学生の派遣を進めたのに対し、

インドネシア・アラブ人協会は植民地の公教育制度の活用に取り組んだ。ただし、この両方を主導する者もいたことから、アラブ人の帰属意識は依然として流動的であったことがうかがえる。スールカティーは、1920 年代末から、イルシャードの教育活動をインドネシア内に限定し、プリブミのムスリムとの協力関係を重視する「現地志向」の立場を明言するようになる。イルシャード内では、1930 年代末までに、「ハドラマウト志向」に対して「現地志向」が優位になった。ただし、「現地志向」の立場をとる者にしても、アラブ人性、特にアラビア語の能力を失い、ホスト社会に完全に同化することを望んでいたわけではなかった。

第 6 章では、オランダによる統治の終了後、日本軍政期と独立革命期を経て、インドネシア独立直後の 1950 年代に、イルシャードがインドネシア社会に統合されていく動きが決定的になることを論じる。1950 年代のアラブ人コミュニティは、プリブミから隔離された少数派集団として扱われるとともに、インドネシア政府が構築する新たな教育制度に対して活動の方針を決めなければならなかった。この時期のイルシャードは、2 つの動きによって決定的な変容を遂げる。まず、イスラーム政党であるマシュミ党との協力関係を構築する中で、「アラブ人、特にハドラミーの組織」ではなく「インドネシアのイスラーム組織」であることを強調するようになった。また、オランダ植民地期の公教育制度を起源とする一般学校系統を教育活動の中心とすることを選択し、アラビア語教育の重視を止めた。これら 2 つの動きは、オランダ統治末期にイルシャードの中で優勢になった「現地志向」と同じ考えに基づいたものだと言える。

Ⅳ．結論

本論の考察から次の 2 つの結論が得られた。第一に、イルシャードの「イスラーム改革主義組織」の性質は決して表面的なものではなく、この団体の結成時に理論的根拠を与えるとともに、その活動に大きな拘束力を持っていた。そして、この性質の中核と言えるスールカティーの思想的特徴は、イスラームにおいてすべての信徒が対等な立場にあるという考え、すなわち「平等主義」を強調している点にある。

第二に、この「イスラーム改革主義組織」という性質は、イルシャードがホスト社会に適応し、統合されていく動きの中で決定的な役割を果たした。スールカティーの「平等主義」は、1920 年代末になるとパン・イスラーム主義的なものから対象領域をインドネシアに限定した「現地志向」に変容する。イルシャード内では、オランダ統治期の末期には「現地志向」が優勢になり、最終的にはインドネシア独立直後の 1950 年代に、イルシャードがホスト社会に適応し、統合されていく動きは決定的なものとなった。

さらに、この結論から、イスラームが国民国家形成期のインドネシアにおいて統合の原理として一定の役割を果たしていたと言える。アラブ人の間では、20 世紀前半にも「アイデンティティ複合」の状態が存続しており、最終的にイルシャーディーたちは、ハドラミーとしてのアイデンティティではなく、ホスト社会の多数派であるムスリムとしてのアイデンティティを強調した。それによって彼らは、ナショナリズムに対して明確な立場をとらないまま、国民国家形成の過程で比較的容易に自分たちの居場所を見出すことができた。したがって、イスラームは、プリブミとアラブ人の間で住民区分の枠組みを超えた社会的な紐帯となっていたのである。

Keio University

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Yamaguchi Motoki

Title of Thesis:

Transformation of the Arab Association al-Irshād in the Emerging Indonesian State: Islamic Reformism, Education, and National Integration

Summary of Thesis:

Al-Irshād (the Guidance) is an association established in 1914 by Arabs living in what is now Indonesia. It advocates Islamic reformism and has mainly engaged in educational activities. The vast majority of the Arabs in Southeast Asia are what is known as "Ḥaḍramīs"—immigrants from Ḥaḍramawt, a region in southern Arabia, and their descendants. Previous research has treated al-Irshād as essentially a Ḥaḍramī organization and argued that its educational activities in the Dutch colonial period promoted the creation of an exclusive Ḥaḍramī identity that encouraged separation from the host society.

Focusing on the activities of al-Irshād, this study examines the Arab community in Indonesia from the early twentieth century until the 1950s from two viewpoints: Islam and national integration. This study has two purposes. First, it elucidates the significance of Islamic reformism in al-Irshād, focusing on the role and influence of its founder, Aḥmad al-Sūrkatī, who was not a Ḥaḍramī but a Sudanese *'ulamā'* (a traditional Muslim intellectual), regarding him as the central figure of Islamic reformism in al-Irshād. Second, examining al-Irshād's activities, this study analyzes the causes and processes of the Arab community's adaptation and integration into the host society. In this regard, it also demonstrates the role of Islam in social integration in the emerging Indonesian society.

Islamic reformism justified the formation of al-Irshād theoretically, and has defined its activities. Sūrkatī's reformist thought is characterized by his consistent emphasis on "egalitarianism," that is, equality among all Muslims. Islamic reformism also played a crucial role in al-Irshād's adaptation and integration into the host society. In the late 1920s, Sūrkatī's "egalitarianism" shifted from a pan-Islamist approach to one more restricted territorially to Indonesia. By the end of the Dutch period, this orientation toward the local society overcame the separatist Ḥaḍramī component in al-Irshād. Finally, in the 1950s, immediately after the Republic of Indonesia achieved independence, al-Irshād's adaption and integration in the host society was complete. Members of al-Irshād chose to highlight their Muslim identity, not their Ḥaḍramī one, so that they could be accepted in the host society. Thus, it is clear that the Arabs maintained their plural identities, and Islam performed a function of social integration during the formation of the Indonesian state.